

白秋詩集『邪宗門』考

——異国的頽唐情操——

川崎和子

一

混乱せる新詩界に立ちて嶄然として頭角を現し来りたる白秋氏の第一詩集なり 収めたる処 魔睡 朱の伴奏 外光と印象 天草島 青き花 古酒の六章詩百二十篇は皆著者の心血を絞りたるものならざるはなし(昂 第壹号 明治四十二年一月)

の広告をもつて、形式内容ともに豪華絢爛たる北原白秋の第一詩集『邪宗門』は明治四十二年三月、易風社から自費出版された。真紅のクロスに金文字の装幀にふさわしい色彩の濃い油絵風の詩風をもつて登場し、詩壇の注目をあびた。当時の詩壇は時代的な転換期に当面していた。蒲原有明、薄田泣菫らの象徴詩があまりに古典的、形式主義的であるのに反発して、もつと自由な詩的表現を求める動きがあり、南国的感覚、浪漫的情操に染められた白秋の詩は歓迎せられたのである。『邪宗門』の志向はその扉銘に

ここ過ぎて曲節メロデーの悩みのむれに

ここ過ぎて官能の愉樂のそのに

ここ過ぎて神経メロデーのにがき魔睡に。

とあるように、曲節メロデーと官能の愉樂に陶醉し、全神経を解放させることであり『神秘を尚び、夢幻を歓び』『腐爛したる頽唐の紅を慕ふ』(『邪宗門序』)ことであつた。頽唐的情緒を求め、未知の不可思議国をあこがれる、デカダンとエキゾティズムを象徴詩に表象しようとしたのである。頽唐詩風のおもかげは、そのかけ出し時代の『文庫』所載の篇にも匂つているものであり、また新詩社浪漫主義の脈をひくものでもあつて、この時代の一般的風潮でもあつたわけである。『スバル』を中心とする文芸は後期浪漫派、別名頽唐派ともよばれている。このような時代思潮の中にあつて『邪宗門』の「頽唐の紅を慕ふ」とはどういう意味をもつのであろう

か。白秋の場合、デカダンが思想としてではなく、浪漫主義精神の一形式としての抒情性を帯びているのであるが、こうしたことは、本集の詩を、分析、総合して行く事によつて、具体的にとらえられると思う。

詩集の例言によれば「情緒の諧楽と感覚の印象」を象徴的に歌つたものであるこの詩集の本質を把握するために、題材、詩語、詩型などの研究を試みてみたい。テキストは初版本『邪宗門』を用いることにする。

二

(一) 題材

まず、主題を暗示している題目を分類して見ようと思う。題目
↓詩材↓詩風と関連づけられると見られるからである。

1 時

○「曇日」「風のあと」「月の出」「驟雨前」「冷めがたの印象」

○「秋のをはり」「十月の顔」「暮春」「立秋」「晩秋」

○「朝」「昼」「真昼」「日ざかり」「夕」「よひやみ」「魔国のたそがれ」

○「接吻の時」「昨日と今日と」「わかき日」

詩題に見る季節は、晩春、晩秋が多く、健康な夏のイメージはないと言える。メランコリックな気配を漂わせ、蒸すようなま暖かい風の吹く曇日や、重い空氣に包まれた驟雨前や、歎きと悔と悩みと戦慄とに精神の疲れを感じる「冷めがたの印象」が詩題とされている。「風のあと」や「月の出」は題目自体に秋のものとされている。清々しさも感じられるが、その底には、官能的な描写によつて頹唐的な雰囲気を出させようとする意図が窺える。

2 場所

○「室内庭園」「蜜の室」「浴室」「鉛の室」

○「砂道」「大寺」「内陣」「海辺の墓」「懶き島」「地平」「桑名」

場所は噴水の水がしたたり、アマリリスが真紅に咲き匂い、ヘリオトロップの芳香が漂っている室内庭園や蜜の室である。それに加えて、黒い天鵲絨、自鳴鐘などの異国的な素材が用いられ、若き日の夢や気だるい感情や刺激を求める官能が交錯する濃厚な情緒を出させている。また、活字拾いや、印刷所を対象とした「鉛の室」にも「うちにじみ倦じつつゆくわがおもひ」「聴くはただ饑えゆく匂のみ」等の表現がみられるように、一連の情緒である。ここで注意したいのは、インキ、末黒の文字、機械、紙などのおよそ詩的な素材とはなり難いものを用いながら、一種独特の詩的世界が形成されているという点である。白秋が拡大した詩

境の一つだといえないだろうか。

「浴室」「蜜の室」ともに腐敗してゆく魂や巷が官能的に表現されている。その他「砂道」「内陣」「大寺」等、素材とする場所は、平凡な所であるが造られた情緒は、頹廢の匂いの濃い美的雰囲気である。そうした趣向は次々に同種の連想をかきたてる。例えば「大寺」で、「凋えたるものにほひ」を充滿させるために「皮交りの襦袢」「裏店の洗流の日かげ」「顔青き野師の女房」「鈍き日」「溝板の臭氣」が歌われるのである。又循環して、頹唐的な色合や臭氣が詩に感じられることになるのである。すたれた物、すたれゆくものに美を見出し、さらに健康的な対象物をも腐敗させることを好む傾向は、一人白秋に限ったことではなかったが、彼にも亦、顕著であつた。

3 感覺的題目

- ①「天鷲絨のにほひ」 ②「麦の香」 ③「夕日のにほひ」
④「吊橋のにほひ」 ⑤「象のにほひ」 ⑥「嗅煙草」
○「鈴の音」「ふえのね」「狂人の音楽」

①は若き日の悩みの情調が天鷲絨のほのかな匂いや手触りによつて象徴されている。ハシイシユ、酢、アプサン等に感覺を麻痺させるその感溺、疲労が「腐れている」と歎くのであるが、凋れた花の匂いを甘く美しいものとして作者は歌っているのである。③も同

様に晩春の悩ましい夕暮に耽美している。酢や石油の匂いが鼻につき、蒸すような夕暮が捉えられている。④も吊橋そのものをうたうのではなくて、吊橋から連想する作者独自の情調の世界である。真昼の沈黙に見る吊橋は、恐怖と哀愁を感じさせるものとして白秋に「暈みて歎く吊橋のにほひ目当にたぎち来る」の表現を強いるのであろう。これらの詩篇は別々の詩であるが、「にほひ」の詩として一篇に羅列出来ないだろうか。と言うのはこれらの詩はどれをとつてみても一連の、同一的な情調がただよっているからである。

4 抽象的概念の題目

- 「夢の奥」「謀叛」「耽溺」「赤き花の魔睡」「疲れ」「狂念」「凋落」「微笑」「一瞥」
○「ほのかにひとつ」「といき」「下枝のゆらぎ」「失くしつる」

これらの題目は抽象的でありその詩風は象徴詩であるといえる。『邪宗門』が象徴詩だと言えるのは、「謀叛」「赤き花の魔睡」「耽溺」「噴水の印象」等の詩が代表しているからである。これらの詩篇は、夢の奥、耽溺などのように、感情の高まり、陶醉などという実態として捉えることの出来ない概念的なものを、官能的描写を通して、実感として把握しようとするものである。

他にも分類することのできる多くの題材があるが、白秋の詩の題材は、又は詩の素材となるものは、そこに頽廢的かつ濃厚な雰囲気をかもし出すことができると思通されるものであれば、すべて良しとなるのである。白秋の詩的天分により、現実に存するものも、しないものも、誇張とたくましい空想によつて、詩化出来、詩的世界が展開してゆくのである。

二 詩語

木下李太郎の批評（『昴』第一卷第五号—『邪宗門』を評す—）をかりれば、「邪宗門の詩は美しき様々の動詞によりて、綴られたる美しき様々の名詞の列である。」と言うことになるが、誠にうなづけるのである。誰のどのような詩であつても、動詞、名詞などが使われていないものが無いのは当然のことであるが、『邪宗門』の諸篇は、それが特に顕著なのである。一見、密度の濃い頽唐思想が主張されていると思える詩でも、それが、動詞や名詞などのことばの持つ、ことばの綾の成せるわざであることが、しばしばである。李太郎が言つてもいるように、「凡ての不可解的対象を奈何にかして解釈せむ……」とするために、詩のことばを分析し、情操の源をさぐりたいとするものである。

1 形容詞

この詩集の詩について特筆すべきは、形容詞の果たす役割と使用法ではないかと思う。その形容詞は本来動詞である語の活用形が、形容詞的に名詞を修飾しているのである。普通の形容詞と比較して、数の上でもまた『邪宗門』の詩風の形成上においても、重要な働きをする語句である。本詩集から拾収すると百十語ほどあるが、次のように整理して考察して行こうと思う。（ ）の中は被修飾語である。

a 腐れたる（曲の縁 大理石 林檎 夢 獣の面 黄金の縁）

腐れゆく（沼 石鹼^{シヤダシ} つづれ）

腐れつつゆく（暗の室）

腐れ立つ（礎）

腐る（百合の蜜）

腐れし（園）

腐れり（ものかげ）

b 饅えて病む（薬^{くすり}）

饅えたる（吐息）

饅え暗む（縦）

饅えてゆく（物）

饅え萎ゆる（芙蓉花）

饅え温るむ（室）

饑ゆる (褐色)

c 暮れもかかる (空気)

暮れて立つ (樅)

暮れもゆく (ゆめ)

暮れなやむ (靄の内)

d 疲れくるめく (衰^{おとろへ})

疲れゆく (赤き都会)

疲れし (光)

e 病みぬる (椿)

病める (ペリカン)

f 瘡^{きず}つける (悪、女神)

瘡き瘡ぶ (血)

傷つける (獣)

g 狂ひいづる (北極熊 樟の芽)

狂ひいでぬる (赤き花)

燃え狂ふ (恋慕の樂)

h 眩暈めく (悲愁)

眩めく (白楊)

眩む (生おびえ)

i 濁れる (河岸 室内 蒼海)

濁りたる (看板)

濁る (窓硝子)

j 凋れたる (もののにはひ)

凋れし (花)

萎びたる (腫)

褪せはてし (髪)

緘みたる (唇)

k かをり蒸す (野の畑)

匂蒸す (銀色の内)

l 倦んじつつゆく (わがおもひ)

倦める (心)

m 朽ちはてし (秋 熔岩)

n 湿る (革の函 あなた 泥^{ぬかるみ}凪)

その他、「なまめきのほめき」「酔ひ痴れし遊蕩^{たはれを}児」「苦悶そふ
歡樂」「噎ぶ夕」「爛れたる果実」などの類がある。すべてこの
ような言葉は人の連想を異様にかきたてる。爛熟して今にも破壊
してしまいたいようなものの形容に使われている。動詞的な形容詞は、
ただその存在状態を靜的に示すものではなく、このように、詩の
情調を濃厚にし、奥行きのある動きをもつものになっている。

作者は、健康的でないもの、生産的でないもの、平凡でないもの

のを好み、それがもたらす情調の美しさ、頹廢美とも言うべきものを創造しているのである。夢や林檎や大理石は、普通には美しく汚れないものである。白楊も蒼海も清々しい感じを与えられるものである。それが、この場合「腐れたる」「疲れたる」「眩めく」「濁れる」等の言葉で形容されるのである。異質な、不つり合いな二つの言葉の結び付きが、アンバランスの美、不協和音的な美を創り出しているのである。

普通の形容詞は意外に少ないのに気付く。

a 赤き(42) 赤く(11) 赤し(5)

青き(15) 青く(3) 黒き(2) 赤黒き(1)

白き(3) 青白き(1)

b 鈍き(12) 鈍く(1) 鋭き(2)

c 甘き(11) 甘く(8) 甘し(1) 苦き(3)

d 酸ゆき(1)

以上のように色彩を表わす形容詞が多く、中でも「赤」「紅」が目立っている。赤で形容されるものは、唇、血、木の実、ポストの類はむしろ少なくて、恐怖、うわごと 謊言、おののき 戦慄、わななき、くるめき、神経、悲苦、音色などの形のない無味無色のものに附いている。次に甘きについてであるが、数は「苦き」や「酸ゆき」よりも多いのであるが、もう少しこの形容詞について考えてみよう。例を

挙げれば、

甘きときめき、甘き驢馬の鳴く音、もの甘き嗟歎の色、いや甘き欲の疲労を、甘き恐怖、あまきうれひの華……などがあるが、「甘き」で形容されるものには、共通する情緒のただよいが感じられる。柔らかで快いが、快活な優しさではない。「ときめき」にしても「嗟歎」や「欲の疲労」にしてもその情調は頹廢的である。味覚である甘さを、触覚や痛覚としての甘さに交錯させているように感じられてならないのである。

次にbの例について考えてみよう。「鋭く」の例は「鋭く甘く」庄しつぶさるる嗟歎して」「肉の鋭き絶叫」の二例である。後者の意は「劇しき歡樂」の「劇しき」と同義であろう。これに対して「鈍き」は数多くある。

びろうど 天鵞絨のものにぶき床に立ち、鈍き眼、亜弗利加の鈍きにはひ、鈍き思、人のゆめの鈍くものうき、鈍き愁、鈍き毛の絨毯、鈍き綿羊の色によぐれに、鈍き思等々がある。すべてどんよりした、うす汚れた感じを出している。生氣のない眼、色、においであり、すべてものうい状態を示すものである。この様な表現は他の「生ぬるく」「生くさく」「蒸暑く」と同様に詩の雰囲気や陰鬱にさせてしまうものである。さて次に、老若を表わす形容詞について言えることは、「若き」がほとんどで、老を示すものは出

てこないということである。甘しという形容詞が、苦しという形容詞よりも多かつたのと同じ現象である。中でも「若き日」という詩句が多いのであるが例を挙げて述べてみたいと思う。

わかき日のなまめきのそのほめき静ころなし

わかき日のその夢の香の

わかき日は暮るれども夢はなほ静ころなし (室内庭園)

わかき日には、まして才ある身には (わかき日)

かくてなほ悩み顫ふわかき日の薄暮のゆめ (青き光)

これやわが胸より落つる (紅玉)

ああ薔薇 汝にむかへば／わかき日のほこりぞ躍る

(渚の薔薇)

かのわかき接吻の思ひ／目ぞ暈む (砂道)

ゆるびぬ潤む罌粟の火は／わかき瞳の滯色に (軟風)

物ゆかしわかき句のいづこにか濡れてすすろぐ (柑子)

水透ける玻璃のうつはに 果のひとつみづけるごとく

わが夢は燃えてひそみぬ ひややかに、きよくかなしく、

(わかき日の夢)

「わかき」の意味は最後に引いた「わかき日の夢」をもつて言い尽くせる。「わかき」の言葉の中に二十二〜四才頃の白秋自身の思いがこめられていると思う。この言葉こそ白秋が何のためら

いもなく使えたのではあるまいか。何でもない一語であるが、偽らない白秋自身の心の叫びが感じとられるものである。

2 形容動詞

形容動詞はほとんど平仮名で表記されている。本詩集に見出せる形容動詞を1の形容詞と同様なやり方で分析、総合してみたい。形容動詞の種類は多く、詩のイメージを豊かに情緒を味い深くしている。細心の配慮をもつて彼の豊かな語彙から抽出したことであろうと窺える。どのことばも動かすことのできないほどその詩にびつたり合つたものである。すべての柔らかく、ふくよかな香りのにおうような情趣をひき出だす意味と響きとをもっている。その結果、詩全体に微妙、繊細な情感の陰影がうごめいている感じを強くさせるのである。

やはらかに(8) あたたかに(5) ほのかに(12) ほのかなる(2) ひそかに(4) ひそやかに(1) かすかに(2) かすかなり(2) 静かなる(2) 静かに(1) あえかなる(3) しめやかに(3) はるかなる(1) おぼろかに(2) 冷やかに(2) にほやかに(2) ふくらかに(1) 清らなる(2) はなやかに(1) 薄らに(2) ゆるやかに(1) 賑やかに(1) なごやかに(1) なよらかに(1) 青やかに(1) あきらかに(1) 等がその例である。中でも一番多く使われているのは「ほのかなり」である。

ほのかにのこる噴水ふきあげの青きひとすじ (陰影の瞳)

ほのかにもやはらかきにはひの園生 (夢の奥)

ほのかにひとつ、またひとつ (ほのかにひとつ)

ほのかなる夢のおきふし (地平)

ほのかなる蟬の火に羽をそろへし鴿 (ほのかなる蟬の火に)

薔薇にはほのかに薄く (朝)

ほのかなる花のさだめに (よひやみ)

ほのかに見ゆる青き頬 (ふえのね)

これらはどれもはつきりしない様子や、幽かで、ぼんやりしている状態や、ほんのり漂ってくる匂いなどが、「ほのかなる」と形容すること、その場の情景、雰囲気が、具体的に造形され得るのである。そしてなお、詩全体にヴェールがかかったような、甘いメロディが流れてくる様な情調をかもし出させる語なのである。

こうした言葉が自由奔放に駆使されて、「曲節」「官能」「神経」が解放され得たのである。そしてまた「腐爛したる頰唐の紅を慕ふ」ということも、ことばとことばが綾なし織なすニュアンスや、詩型が作り出すリズム感などが交錯して生まれる複雑な情調を慕うということではなかったのだろうか。

3 名詞

巻頭の「邪宗門秘曲」はこれこそ『美しき様々の名詞』(木下

幸太郎評)から成っている詩である。名詞を取り出していると一篇の詩は全部名詞からできていると言った方が早いほど、多くの名詞から組立てられている。末世の邪宗、切支丹でうす、黒船、紅毛、不可思議国、南蛮、棧留編、阿刺吉、珍葩の酒等、皆漢語を使用して奇異さと、異国的情緒とを出している。異国的な、不可思議な夢幻の国が目の前に繰り広げられ、魅惑的でもあるわけだが、それ以上の主題をさぐることは無意味なことでもある。

「邪宗」の原義、又は想念、信仰についての思索などは、はじめから無関係な所に創作されていると見なすことができる。例言にもあるように、『予が詩を読まむとする人にして、之に理知の闡明を尋ね、幻想なき思想の骨格を求めむとするは謬れり。』ということが明らかである。ヘリオトロオプ、Hachisch, Whisky, Curacao, Toronbone, ヴァイオリン、マンドリン、オボイ、ギョラ、セロ、バツソ、クラリネット、フルウト、管絃楽部、茴香酒、亜刺比亞、囁囉コロロホルム仿謨、光素エエアルなどの異国からの渡来物、珍奇な物品を巧みに使用して、エキゾティシズムと、デカダンの心情を数々の作品に歌い出しているのである。この名詞の項について、考えて置かねばならないのは、象徴詩集として出されたこの『邪宗門』に於いて、一人称の代名詞が多く、自ら、その心情、抒情といったものを歌い出している点である。詩章に、「われ」「汝」が

歌われ、直接に感情の吐露が表出されているのは、象徴詩としてよりも抒情詩としての浪漫性を帯びているものと見られる。しかもこの「我」「汝」は、個性、我の自覚、我の確立という近代的精神の目覚めとしてのそれではない。自我の拡大を、感覚的、官能的な表現の中に求めたのである。現実から目をそむけ、異国的なものの感覚と印象とを、刹那に楽しもうとする。一方ではデカダンの情調に感溺する事で、かろうじて我の存在を見出しているのである。こうした状態は、その末期的文学精神の流れと、無関係ではなかつたのである。

三 詩型

『邪宗門』一一九篇の詩のほとんどが、一行を五音と七音とを基調として構成されている。定型詩の型となつてはいるが、表記法やその他の点に工夫がなされ、リズムの単調と詩情の枯渇を避けている。単純な基調を巧みに生かして音楽的な調を創り出す詩型となつてはいる。集の代表作品といえるものを抽出して検討することにしたい。

1 五七調

本集のほとんどの詩がこの型である。「わすれなぐさ」「よひやみ」「秋のをはり」「旅情」等々がある。いずれも淡白な美しさをもつ抒情詩である。五七の単調さと、その詩のもつ清新さと

がみごとに調合されている。五七のリズムに乗つて、白秋の抒情が流れるように歌われているのを感じさせるものである。五七に他のパターンが加わつて、やや複雑になつてのが「耽溺」「地平」である。

2 七五調

七五調は藤村詩にその典型を見る一般的な詩型であるが、白秋の場合はこの詩型を用いた詩は少ない。「あかき木の実」「空に真赤な」「酒と煙草」「日ごとに」「軟風」の五篇である。七五調という既成のものにはあきたらなかつたのであろうか、その調子を破る七四調を試みているのである。

3 七四調

「ふえのね」「恋慕ながし」「舗石」の三篇ではあるが、七五調よりやや軽く、きつぱりしたリズム感を受ける。

ほのかに見ゆる青き頬／あな・あな・玻璃のおびゆる

かなたにひびく笛のね／青き頬はのに消えゆく

空にもつのるふえのね／ふたつのにはひ盲ひゆく

きこえずなりぬふえのね／内と外とのなげかひ

またしも見ゆる青き頬／あな・また玻璃のおびゆる

4 五五五調

「灰色の壁」と天草雅歌章の「角を吹け」「ほのかなる蟻の火

に「鱗を抜けよ」の三篇とがこの型である。天草雅歌の南国的牧歌的な暖かさは、この詩型の響と相まつて、伝わってくるのである。五音だけで構成される快いリズムは、白秋創作のものではなく『海潮音』の訳詩（「落葉」など）に見られるものではある。

が、天草雅歌の三篇は模倣といつてしまうには捨て難いものである。否、白秋自身が生み出した詩型といつていい程、形式と内容とが融合されている。五音が切れ切れにならずに、調和のとれた美しい和音の奏でる韻律が響きわたっている詩であると思う。

5 五七五・七七七調

「傾き島」「蜜の室」「濃霧」などの詩はこの音韻構成の詩型をもつ詩である。

濃霧はそそぐ…腐れたる大理の石の

7 5 7

生くさく吐息するかと蒸し暑く

5 7 5

はた・冷やかに官能の疲れし光し

7 5 7

月はなは夜の霧囲気の朧なる恐怖に懸る

5 7 5 7

6 その他

「謀叛」「噴水の印象」「曇日」「赤き花の魔睡」など彼の初期の詩風を代表する作品に受ける音楽的律調ともいふべきものは、詩の内容、ことばの響き、詩型の各々が調和して出来上った曲節である。詩型の基調音は五七であるが、組合せが複雑である。こ

れらの詩に見ることのできる音楽的象徴（リズムや響きが何かあるものを表象している。）と内容に見る官能象徴とが、白秋の言う象徴詩であつたと受け取られる。

「謀叛」の構成は一連が5 7 / 5 5 7 / 5 5 5 7 / 5 5 5 / 5 5 5 / の五行からなるものである。数字で示してしまえば、複雑な韻律構成でもないのであるが、どの連にも「ののの」という「の」の音で結びつけられて行く各々の行の間に、柔らかで余韻のある情調が複雑に交錯している。一節一節ごとに感情が高まり切迫していく感じが、背後で奏でられるヴァイオリンの音色と共に一層高められているのである。それが又、いかにも題名の「謀叛」が起りそうな気配をただよわせるものである。

「曇日」もまた同じ様な部類の詩であろう。五七音のもつ古さをなくして近代的感觉に合つた新しい音律を出している。デリケートで、ひそやかな感情をバツクミュージックのようにして奏でながら、一方では腐れた情緒が濃厚に漂い出るのである。「いぎたなき駱駝」「鈍き綿羊の色によぐれ」「ペリカンのけうとき叫」「山猫のものさやぎ」などの「猥らな獣」による生暖かい、生くさい餓えた頹廢の情感が示し出されている。

「噴水の印象」―この詩も基調は五七音であるが読者にその構成を簡単にはわからせてくれない。はじめの一行、「噴水のゆる

きしたたり。——」は、五・七と分けるよりも一行十二音でもって、噴水が絶え間なくふきあげ流れる継続した状態を示すものと見た方が適當である。「噴水のゆるきしたたり。——」「噴水の病めるしたたり。——」「噴水の甘きしたたり。——」は噴水的情景と水のしたたり落ちる音とそのリズムまでも表出させる効力をもっている。白秋の目に映る噴水は、実態としての噴水ではなく、「さざめき」「あまき嗟歎の色」「接吻の音」などがつきまとう、又、こうしたものを必ず連想させる噴水なのである。見たのはそのものを通しての情調なのである。言い換えればそのとらえ方が情趣的なのである。腐れゆくもの、ほろびようとするものに美を求める時代的な風潮が白秋自身の詩にも大きく影響していることが窺える。

以上のような作業を通して言えることは、白秋の詩の「頽唐の紅を慕ふ」ということは、頽唐的な雰囲気好むということになるであろう。たとえ素材が現実的、生活的なものであつて、それを醜惡に描写していても、決して現実の真相の暴露を試みようとするものではない。不健全で頽廢的な対象から発散されてくるに
おい、空氣、ムードを楽しもうとするのである。そして彼自身、その雰囲気を感じることが出来た時、そのものは美として創造

されるものとなるのではなからうか。それがたとえ、客観性、普遍性を始めから備えているものでなくても、読者はそうした詩にひかれ、一詩人の創造した美の世界へつれてまわっていくのを感じ知らされるのである。

(昭四〇 日文卒